

方言敬語法体系の方言地理学的考察

——愛知県地方方言のばあい——

江 端 義 夫

はじめに

東西二大方言が接衝する中部地方域には、両方言の混淆、対立の状況が見られる。愛知県地方域の方言状況についても、同様のことが言えよう。しかし、中部地方域および愛知県地方域の方言現実態について、具体的な諸事象の分布事実を掲げて考察した研究は、あまり多くないようである。特に、表現法面での研究報告は、従来、きわめて部分的なものでしかなかったかと思われる。

本稿で筆者は、愛知県地方域の方言敬語法について、方言地理学的な考察を行なう。主として、尊敬法、謙讓法に関わる若干の方言事象分布図をとりあげ、諸事象の史的連関を考察し、さらに統合的な解釈を試みる。

なお、本稿で使用する方言資料は、すべて、筆者が一九六六年—一九六八年に、方言地理学的調査を実施して得たものである。また、一九六三年から一九八〇年までの間に、断続的に自然傍受調査を行なって採録したものである。

一、尊敬法の分布事態——その一

1、尊敬法総論——「このお菓子をおあがりなさい」の分布

第1図は、近所の心やすい人などに、おあがりなさいと菓子を勧める言い方の、老年層図である。

(1) ▲タベヤー▼

第1図では、愛知県の尾張地方全域に、「タベヤー」事象が見られる。知多半島や三河西部に、これが著しい分布を示す。名古屋市の中心部では、やや、その勢力が弱いのが、濃尾平野の周辺部には、それが、かなり認められる。ところが、三河地方の中部から東部にかけては、「タベヤー」などの「ヤス」尊敬法助動詞が、まったく分布していない。静岡県地方にも、これは認められない。

尾張地方に分布の顕著な「ヤス」尊敬法助動詞は、どのような待遇品位で使用されているのであろうか。総じて、「ヤス」は、親しみのこもった、敬意の高い表現に使用されているようである。男女ともにこれを使用し、女性のもの言いの方に、より多く認められる。

らう。

(3) ♂オアガリマシヨール

第1図では、「オアガリマシヨール」類の事象が、渥美半島域および三河東部に分布する。

○ワリーケド オサメトイテ オクレマシヨ。すまないけれど、納めておいてください。(老女↓老男) 渥美郡田原町、一九六七

○カンシヤ シトイデマシヨ。お母さんに感謝しなさいよ。(老女↓筆者) 同上。

ところが、三河の中央部以西には、それが見られない。「オイマシヨール」などの未来化表現によって、尊敬の命令表現が醸成されるというのは、注目されることである。たとえば「オアガリトクレマシヨール」「オタバマシヨール」「オトリテオクレマシヨール」「タバテオクレマシヨール」などが、第1図では認められた。これらは、上待遇の尊敬表現法の事象であり、「(オ)ーリン」よりも品位が高い。

しかし、第2図には、「オイマシヨール」類の事象の分布が、まったく存しない。あまりに隠微であるため、これは、少年層者には、使用しにくいであろう。

(4) ♀クワシヤイ

「クワシヤイ」「クワツシヤイ」「クワサイ」「タバテツシヤイ」という古態の敬語表現が、第1図では、知多半島の南端部、および渥美半島の南端部、篠島、それに三重県の答志島に分布している。第2図を見ると、知多半島、渥美半島におけるそれらの分布は消え、篠島・答志島にだけ残っている。この消え残り方の次第によって、両半島よりも古いものが、島の方に遺存しがちな傾向が、知られよう。

(5) ♀タバテゴロジヨ

第1図で、これは浜名湖辺の一地にのみ、見られる。これは、「食べてごらんぜよ」からの転化によるものであろう。

(6) ♀タバテオクレ

これは、第1図で二地点に見られる。第2図には、存しない。「イテオクレ」は、あまり敬意が高くないものであるために、「おあがりなさい」の待遇品位と対応しないのであろう。

(7) ♀タバテラッセ

老年層では、三河地方の中北部の二地点に、これが見える。「クワシヤイ」の「シャル」ことばと、「タバテラッセ」における「セル」ことばとは、同系である。しかし、分布域は不連続である。これは、「シャル」の古態性を避けて、「シャル」の派生形「セル」を、尾張地方の平野部で生み出したからだと解される。その尾張地方では、「セル」さえ、すでに古めかしいものと見なされ、敬意の度合が下ってきているけれども、三河西部地方の二地では、待遇品位のさほど低くないものとして、残存させているようである(「セル」助動詞による敬語法については、後述する)。

(8) ♀タバテチヨードイ

これは、第1図では尾張地方の北部に、著しい分布が見える。第2図では、その分布の濃度は薄いが、分布域は第1図のと、よく似ている。

(9) ♀タバテクダサイ

尊敬表現を求める質問文によって、謙讓表現の事象が、得られたのである。これも自然の理である。第1、2図双方に、それが、若干見える。

(10) △タベナサイ▽△タベナイ▽△タベナ▽

「ナサル」類の言い方は、第1図で、かなり広い分布が見られる。特に、静岡県域から渥美半島域にかけて、「タベナサイ」が顕著である。「タベナイ」「タベナ」は、散在分布であり、目立たない。しかし、第2図になると、「タベナサイ」「タベナイ」の分布は、少なくなっている。反面、新しい形としての、「タベナ」という気さくな感じの、敬意のこもった言い方が、静岡県域で著しい分布を示し、周辺にも散見される。

(11) △タベテ▽

言いさして、言外に余情を含ませる敬語表現として、「タベテ」がある。この分布は、第1図に少なく、第2図に多い。少年層者は、あまり上待遇の表現に馴染まず、簡便の方に従うようである。

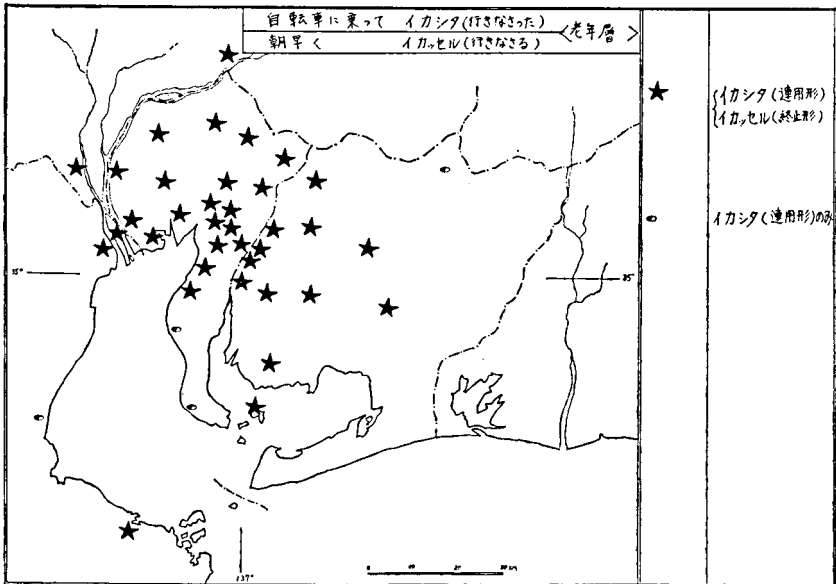
2、第三人称の尊敬表現を特色とする「イカシタ」「イカッセル」

第3図、第4図は、次の二つの質問文によって得た方言資料を、地図化した老年層図および少年層図である。

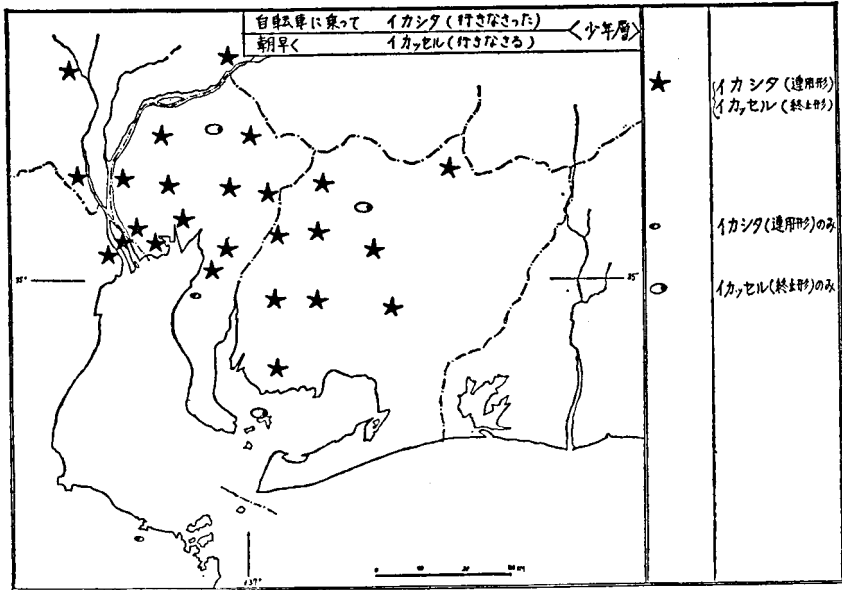
「自転車で乗って行きなされた」という時の「行きなされた」ということを、「行カシタ」と言いませんか。」「朝早く行きなされる。」という時の「行きなされる」を、「行カッセル」と言いませんか。上の質問文では、「セル」尊敬法助動詞の、連用形・終止形を使用するかどうか、尋ねられているのである。

第3図では、知多半島の中南部を除いた尾張地方に、「イカシタ」「イカッセル」の強力な分布が、看取される。それは、第4図の少年層においても同様である。この「セル」助動詞による尊敬表現法は、当該地域で、安定した地位を占めているのである。

第3図



第4図



また、第1、2図の「タバヤ」の分布と第3、4図の「イカシタ・イカッセル」の分布とを、重ね合わせてみよう。両者の分布領域が、かなり類似していることが知られる。つまり、両事象間に、明瞭な用法上の使い分けが存するのではないだろうか。そのために、用法上の混乱が生じないのであろう。

野村正良氏は、愛知県西春日井郡北里村の方言における「セル」について、「その動詞の表わす動作の動作主に対する話手の親しみのない敬意(概して傍観的な)を表わす。:(中略)::一般に相手の動作について用いられることはないが、ただ命令形に限り、対等以下の相手に対して用いることがある。」と記しておられる。鏡味明克氏も、次のように言われる。「第三者に対するよそよそしい敬意を表わし聞き手の動作にはつかない。ただし命令形のみ対等以下に、主に子どもに親しみをこめて使われる。ハヨキサツセ(早く着なさい)命令形以外に聞き手の動作につける場合は抵抗感があるから、逆に皮肉や諧謔の文脈をつかって用いられることもないでもない。:(中略)::単にていねい語としても用いる。」鏡味氏は、野村氏が「セル」を、「動作主に対する親みのない敬意」とされたのを、言い改め、「第三者に対するよそよそしい敬意」としていられる。さらに、「セル」の用法に、「皮肉・諧謔・ていねい」を見出していられる点が、注目される。たしかに、「セル」の品位は、「ヤス」に比べるべくもなく、低い。「ヤス」は、二人称者への敬語として頻用され、しかも三人称者の動作にも、多く用いられている。特に、名古屋市中核とした尾張北部の平野部で、この傾向は著しい。「セル」は、情味の乏しい客観的な姿勢での敬語と、受けとられがちであらう。

しかし、名古屋周辺域では、「セル」が、まだ、純粹な対者⁽¹⁰⁾尊敬語として使われている。

○ナンゾ チキリニ イカッセル。何か、もぎ取りに行きなざる？ (老女↓筆者) 愛知郡長久手町、一九六八

だが、その例は、ごく稀になっているのが、趨勢である。やはり、「セル」は、「主に第三者に対する尊敬語として用いられる。多少の遠慮の気持がこめられ、ある一定の敬語的距離を第三者との間に置いていることを、感じさせるものである。」といえよう。たとえばそれは、次のような例によって、確認されよう。

○シナシタ シニュー オキョーオ アゲル。亡くなられた衆の為に、お経を唱える。(老女↓筆者) 海部郡飛島村、一九六七

○シアワセニ イカシタソイテ……。幸せに逝かれたと噂して……。 (老女↓同) 名古屋市緑区鳴海町、一九六八

○ウマレテ ココニ オラッセル ニ。ソノ ヒトモ ロクジューダエーダニ……。生まれて以来、ここに居られるよ。その人も六十才代だから……。 (老女↓筆者) 同上

○ヒカラッセルセンガ……。先生はお叱りなさらぬが……。 (老女↓同) 海部郡甚目寺町、一九六七

○オハナシオ サッセルト ナルホド ナ ソイテ キーテクルダ ガナ。講師がお話をなさると、なるほどねと言って、聞いてくるのですよ。(老女↓筆者) 名古屋市緑区鳴海町一九六八

○オカーサン ナミダ コボサッセル。あなたのお母さんは、きつと涙をおこぼしになるにちがいない。(老女↓筆者) 東海市横須賀町、一九六七

これらの「セル」で待遇される対象者は、順に、「死者」「死者」

「近隣老女」「先生」「講演会の講師」「対話者の母」である。話者が、話題中の彼らを、上位に待遇し、いくらかのへだてを置いて表現を仕立てているのである。

さて、第3、4図において、知多半島の中南部は、「セル」の分布が空白である。これは、この地域に、第1、2図で見られるような、古態の「シャル」尊敬法が存するからである。すなわち、「イカツシャル・イカツシャル」が行なわれているのである。

以上、尾張地方域に見られる「ヤス」が、対話者にも第三者に対しても使用できる、高い待遇品位の尊敬法であり、「セル」が、主として、第三者に対して、遠慮を抱いて使う上等品位の尊敬法であるという、二重構造を分析し、考察した。

二、尊敬法の分布事態——その二

ここでは、「ミエル」「ゴザル」を問題とする。これらが、補助動詞として、「ーテミエル」「ーテゴザル」のように使用される事実が、愛知県地方では、特に興味深い。

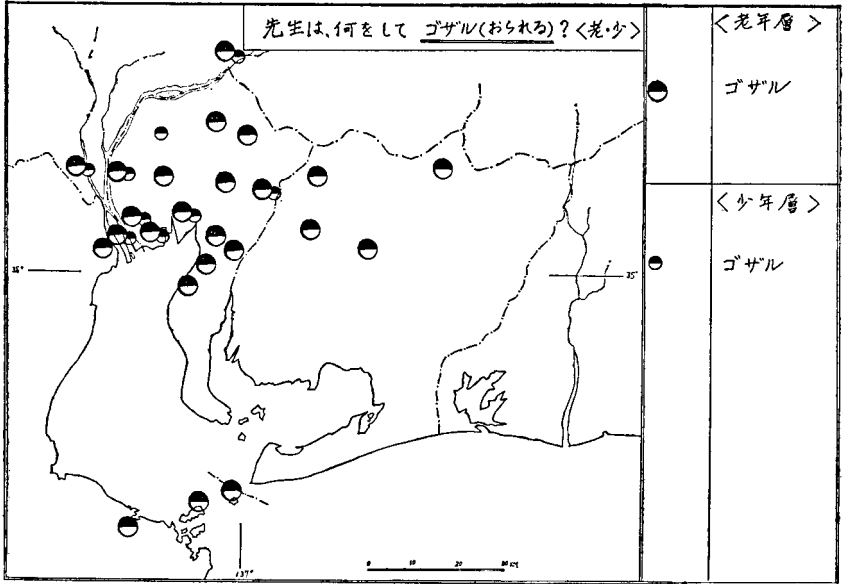
1、新鮮で隆盛な「ミエル」

第5図には、「すっかり暗くなったのに、あの人はまだ、仕事してミエル(おられる)」のような言い方の、行なわれている地域が示されている。

老年層では、愛知県地方のほとんど全域に、「ミエル」が分布している。三河湾岸の地域に、その分布が薄いのが、注目される。

ところが、少年層では、「ミエル」が沿岸地方に色濃く分布する。一方で、三河東部の北隅地方には、それが見えない。静岡県地方では、それが、極くわずかの分布域にとどまっている。静岡県地

第6図



○ナァニ、ワシニ ニテ、ゴザラシン。いいえ。私に似ていらっ
 しゃらない。(中女↓同) 同上
 今日の「ゴザル」使用者は、これを上待遇品位のものと思意識してい
 る。少年層者は、「ゴザル」を捨て、「ミエル」に従おうとしてい
 るようである。

三、謙讓法の分布事態

1、「チョーダイ」の強力な分布

(1) △チョーダイ▽

第7図は、「この菓子をください。」に関する老年層図である。
 「ください」に相当する謙讓表現の諸事象は、このようであろうか。
 第7図の老年層図によると、まず注目されるのが、広く全域に散在
 分布する「チョーダイ」である。若干の実例を掲出する。

○ヨ一 キテ チョーデアーシタ。よく来ててくださいました。

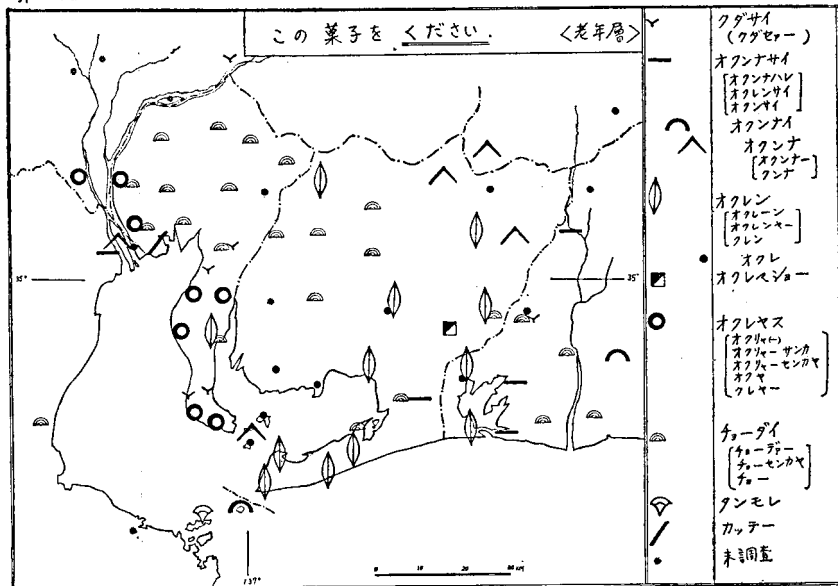
(老女↓筆者) 名古屋市昭和区平針、一九七二

○ヨ一 キテ チョータ。よく来ててくださいました。(老女↓筆
 者) 名古屋市緑区鳴海町前ノ輪、一九六八

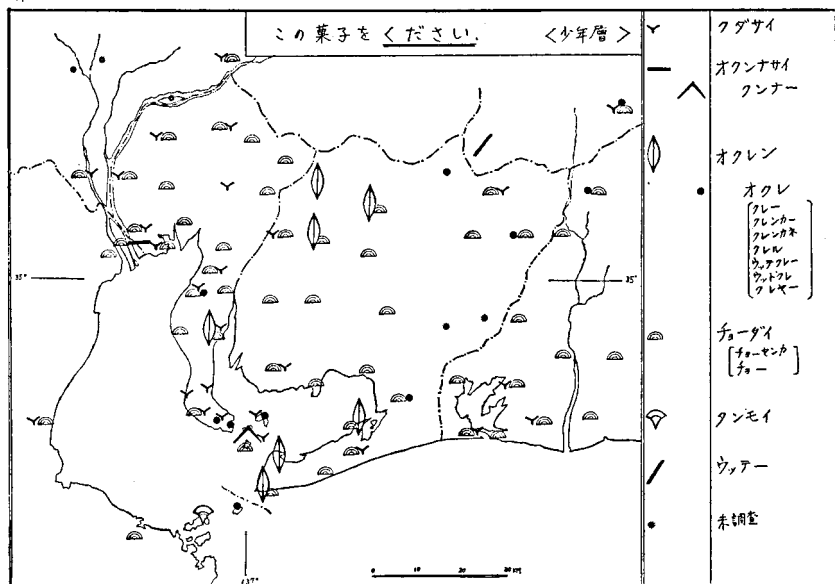
○キ一テ ミテ チョーデアー。聞いて見ててください。(老女↓
 筆者) 海部郡甚目寺町、一九六七

これらの「チョーダイ」は、方言伝播の遅れがちな知多半島、渥美
 半島および島嶼には、まだ十分には分布していない。「チョーダ
 イ」は、強力な伝播力を持っている。その証拠に、第8図の少年層
 図では、「チョーダイ」が、当該域の全体に、広大な分布を示して
 いるのである。第8図では、これ以外の謙讓表現の事象は、稀に分

第7図



第8図



布するばかりである。「チョーダイ」の強大で単独な分布が目立ち、老年層図で見られた諸事象の分布が、ことごとく、排除されているのが注目される。

2、その他で注目される事象

(1) △オクレヤス▽△オクレン▽

第1、2図では、「ヤス」尊敬法が、尾張地方で、老・少年層ともに、盛んな分布を示していた。「ヤス」は、第7図での謙讓表現法においても、「オクレヤス」の形で、尾張地方の辺境や知多半島に分布している。しかし、少年層図(第8図)になると、もはや、「オクレヤス」の分布は消えてしまつて、「チョーダイ」に替つている。

ところが、「オクレン」という事象は、謙讓にも尊敬にも用いることができる重宝なものである。第7図では、「オクレン」が、渥美半島や三河の諸地域および県境に近い浜名湖西域で、単独に存立している。「オクレン」の分布は、かなり安定しているのである。第8図においても、「オクレン」が、「チョーダイ」の伝播に抵抗して、それとの併存のあり方を、三河地方域で示しているのが、注目されるのである。

(2) △タンモレ・タンモイ▽


三重県の志摩地方では、答志島の老年層者に、「タンモレ」が行なわれている。これは、中世以降の謙讓語の動詞「たまはる」の命令形の流れをくむものであろう。答志島では、少年層においても、末尾のラ行音を脱落させた「タンモイ」が見られ、方言の古拙性が、あざやかである。

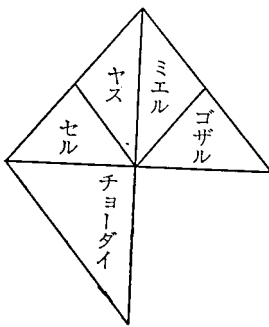
以上が、謙讓法の分布の概要である。

四、方言敬語法の諸事象分布の統合

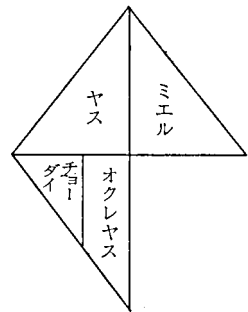
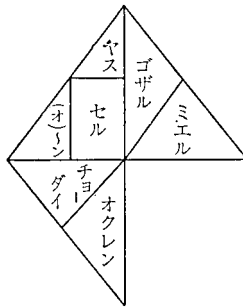
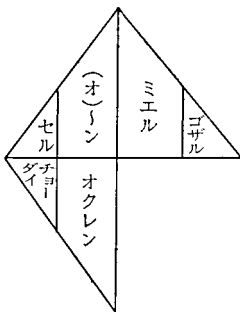
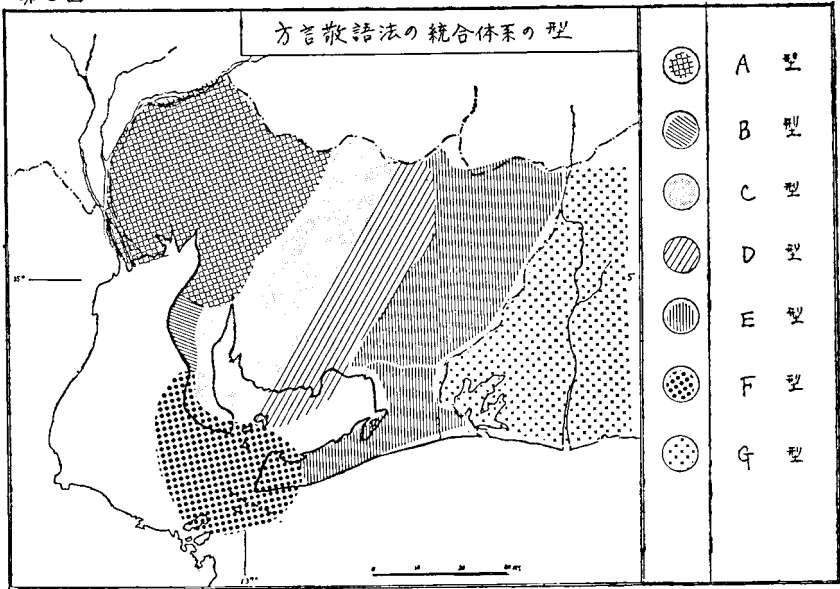
愛知県地方域には、敬語法の多様な事象がとり行なわれている。如上の敬語法の諸事象分布域に、どのような敬語法体系が存するのであろうか。丁寧法をとりあげてはいないが、次下の七種類の敬語法体系を、帰納することができよう。それらを仮りに、A、B、C、D、E、F、G型と名づける。

愛知県地方域の方言敬語法の諸事象が示す個別的な分布のありようを、見通し、重ねあわせ、主要なものを抽象化せしめて、体系化を試みれば、第9図の如く「方言敬語法の統合体系の型」が、地域と対応して、帰納される。

以下には、それぞれの敬語法の統合体系の型について、その型の実質がどのようなかを見えていく。菱形の一隅が欠けているのは、丁寧態の方言事象分布図を、ここで取上げなかったからである。型の内部では、左右が張り合う関係であり、上下が敬意の度合を示し、面積の大小は、盛衰の度合を表わすこととする。また、が尊敬法を表示し、エの方が動作態であり、ソの方が存在態である。その下方の▽が、謙讓法を表示する。



A型……尾張地方の北部に見られる敬語法体系である。
尊敬法の諸事象が多彩である。謙讓法は、新事象「チョーダイ」が強力である。



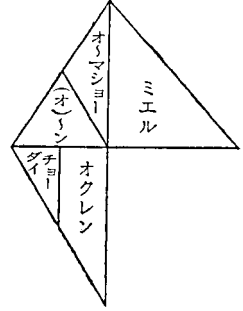
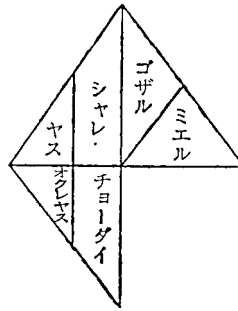
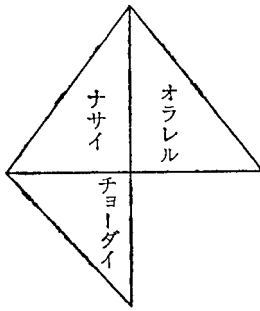
B型……知多半島中部、伊勢湾岸域に見られる敬語法体系。

近畿的な色彩が強く、かつ、A型の影響下にもある。

C型……西三河と知多半島の西半部域とに見られる敬語法体系。

最も複雑である。尾張と三河との敬語諸事象の複合体系が形成されている。

D型……三河の中部域に見られる敬語法体系である。しだいに尾張の敬語特徴が薄くなって、三河らしい体系になっている。



E型……東三河地方と渥美半島地方とに見られる敬語法体系。
これは、三河方言の特色を示す敬語法体系であると言えよう。

F型……両半島先端域、および島嶼域に見られる敬語法体系。
近畿に近い尾張的な特色が見られる。しかも古態性がとりたてられるものである。

G型……静岡県地方域（遠江）に見られる敬語法体系。
これは、全国共通語での簡潔な敬語法体系と同じであるこのG型と他の型とを比較するならば、愛知県地方域の敬語法体系の顕著な特色が、知られよう。

以上、具体的な諸事象の分布を総合し、主要な敬語事象を骨子とした「方言敬語法の統合体系」を帰納した。それらについて、分布域を表示し、型の説明を行なった。愛知県地方域における方言敬語法の地理的、体系的事情は、如上のように認められた。

〇おわりに

最後に、愛知県地方域の方言における方言敬語法の特色を、整理して簡条書きすれば、次のようである。

① 地域社会のまとまりごとに、敬語法諸事象の張り合い関係があり、敬語法体系が認められる。大きくは、旧藩領域の境界に規定されることもあるが、必ずしもその通りには、なっていない。

② 方言敬語法の統合体系の型（A型→G型）が、それぞれ独自性を發揮している。

③ 七つの型は、当該域での主要な敬語法事象によって形成された統合体系である。背後に、たくさん敬語法諸事象の群落が存することは、言うまでもない。

④ 尊敬法の一事象が、必ず尊敬を表わすというのではない。「ヤス」が、尊敬、謙讓、丁寧、卑罵の表現効果を担うことは、当然、ありうるのである。慣用の中で抽象化を行なうと、「ヤス」は、尊敬の働きが主要であると言えるのである。

⑤ 愛知県地方域の方言敬語法の分布状態では、静岡県地方からの方言伝播の影響は、あまり大きくない。むしろ、名古屋という地方の中心地から伝えられる方言文化の力の方が大きいようである。

(注)

(1) 拙著「中部地方域の方言の打消過去表現について」(『言語研究』第73号、昭和53年)にも、それについての論述がある。
(2) 拙著「愛知県地方の方言の分派とその系脈」(『広島大学教育学部紀要』第二部第22号、昭和49年)にも、それについての論述がある。

(3) 『口語法分布図』(国語調査委員会、明治39年)が、特に注目される大事業である。

(4) 以下同様に、愛知県という県名を省略し、郡市から書き示す。
(5) 「ヤンス」も「ヤス」と同様に、やさしい表現性があるが、愛知県域では、春日井市辺に、わずかに聞かれる程度である。

(6) 『国語学大辞典』(国語学会編、昭和55年)の「方言の表現」項下に、「特殊表現法」の項があり、福島県下の「しナンシヨ」が、注目すべきものとして、掲げられている。

(7) 拙著「知多半島南粕谷方言に見られる「行かっセル」などの「シャル(サッシャル)敬語法について」(『方言研究年報』第16巻、昭和48年)

(8) 『日本方言の記述的研究』(国立国語研究所、昭和34年)の一三三頁。

(9) 「方言の実態と共通語化の問題点―愛知・岐阜」(『方言学講座』第二巻、昭和36年)

(10) 拙著『尾張知多半島一小方言の敬語法』(『方言研究叢書』第八巻、昭和53年)にも、それについての論述がある。

(11) 藤原与一先生著『昭和日本語方言の総合的研究、第一巻、方言敬語法の研究』(昭和53年、一七三頁)には、「タンモレ」

についての筆者の調査結果が、取りあげられている。

(12) 方言敬語法以外の諸事象の分布については、いかがであろうか。個々の事象の分布について、共時的にも通時的にも、緻密な実地研究を進めていかねばならない。最近、彦坂佳宣氏によって、尾張方言についての文献研究が、力強く推進されてきている。

(参考文献)

- 1、藤原与一先生『方言敬語法の研究、第一、二巻』(春陽堂、昭和53、54年)
 - 2、柴田武先生『言語地理学の方法』(筑摩書房、昭和44年)
 - 3、吉川利明氏・山口幸洋氏『豊橋地方の方言』(豊橋文化協会、昭和47年)
 - 4、国立国語研究所『敬語と敬語意識』(昭和32年)
 - 5、芥子川律治氏『名古屋方言の研究』(泰文堂、昭和46年)
- 広島大学助教授 —